巻頭エッセイ

出会いからの我が人生

一般財団法人民事法務協会顧問　佐々木　暁

「我が人生を振り返る」などという大そうなことは、果たして私ごときにでも訪れる時があるのだろうか、そんな時が来るとしたらどんな時にどんな情況、どんな心境の下に…と想いながら、ウォーキング（単なるお散歩と言う者もいるが）していると、突然つまずいた。即、振り返り地面を睨む、があくまでも平坦な舗装路で、ごみ一つ石ころ一つ無い。靴を見る、異常など無い。当然即座に周りを見る。誰も見ていないことにホットする。一連の動作を完了して、初めて己の足が上がっていなかったことを苦笑いしながら認め、再び前を振り返り歩き出す。イエ、否、これから話を進めたいのは、その振り返るではなく、己の人生、生きてきた様を辿り、何処かで誰かに語るような時が来るのだろうかということである。

齢75にして人生を振り返るなどと思ってみたところで、特別なことは何もない。華々しくもなく、悲惨で悲嘆にくれたでもなく、儚くもなく、驚くほどのこともない己の人生を振り返ったところで、「平々凡々、つまずき転倒しながらもまあまあの人生でした。」ということになりそうである。

しかし、平坦な道でつまずいているということは、我が身体上・健康上の衰えでもあること、健康寿命（令和元年男72.68歳）、平均寿命（同81.41歳）の中間である不健康期間の最中にあること、後期高齢者という名誉ある？称号を頂戴したこと等を考え合わせ、少しばかりこれまでの自分を振り返ってみたい。

一つの側面から見てみると、今ある己の歩んできた道は、歩ませて頂いた多くの人との「出会い」を辿ることが全てのような気がする。敢えて言うなら、私のこれまでの人生は、全て人との出会いから始まり、節目節目に出会った人との関りから生まれ、進むべき航路を示唆して頂いたような気がする。今でも振り向いた先に、空の上に、それらの方々の笑顔がある。

最初の出会いは、小学生だった頃から始まる。小学3年の時、私の生まれ育った家のすぐ前にある小学校に新しい校長先生が着任した。ご家族の中に私と同級の男の子と一つ下の男の子がいた。小さな小学校で2学年一教室の複式学級である。上級生の授業も下級生の授業も筒抜けで、隣の授業に手を挙げては叱られた。この校長先生は万能型でしたが、特に、習字、絵、ソロバンに強く、息子の手習いの相手に近所で一番近い私が校長先生宅に呼び出された。書

いた習字や描いた絵は、いつの間にか校長先生が展覧会等に出品して、鉛筆やノートを賞品としてもらってきてくれました。ここで書道、絵画は天才的能力を発揮し過ぎたため、才能が枯渇してしまい、以後、その片鱗すら見ることは無くなった様である。ソロバンは、5年生の時、家の隣の教員住宅に着任した新任の背の高い九州男児の先生に買って頂いた。先生の住宅の家事と夕飯のお付き合いのいわばアルバイトの名目である。500円だった。それまでは、校長先生からの借り物だったので、最高に嬉しかった。しかし、残念ながら指が短すぎて？2級止まりで投了となった。その為か、この九州男児の先生は、私が小学校を卒業して、隣町の中学校に通うようになっても、学業を途中で投げ出さないかと、学期末の終業式の日の下校頃、バス停の先の小学校の職員室の窓から大声で「通知箋」(「通信箋」)、「通知箋」と叫んで手を振り、成績の点検・評価をしてくれた。中学卒業までまるで今も担任のように指導して頂き感謝している。小学時代に校長先生等のご指導で、いわゆる読み書きソロバンの丁稚奉公の基本的なものがほんわかと身に付いたんだろうなと、また感謝である。

中学時代は、隣町の一学年6組もある中学校で過ごしましたが、団塊世代を肌で感じた時代で、友人もそれなりに出来たが、残念ながらあまり記憶に残る出会いに巡り合えなかった。

高校進学は、家庭の経済的事情もあり、諦めていたが、悔しい思いもあり、受験勉強は続けて、親には内緒で受験した。同級生に負けたくない気持ちと、意地の力試しであった。間違って合格しても、こちらから断ってやる、との思いが強かった。たまたま、受験した高校で叔父が教師をしていた。試験の結果発表の日、めったに我が家に来ない叔父が突然やってきて、父と何か秘密めいた話をしていた。後で知らされたことであるが、入試の成績が意外にも良かったらしくて、もったいないから？進学させてはどうかと父を説得しに来てくれたとのことである。叔父が学費を出してあげるからという話はなく、結局のところ、自分で学費を工面するならという条件付きで進学が許された。この叔父は、父を含めた15人の兄弟姉妹の中で、ただ一人大学に進んだ人でした。学費は出してくれなかったが、父を説き伏せてくれたことに、只々感謝している。もちろん、新聞配達、ヤクルト配達、コンブ漁の手伝い等のアルバイトは何でもやった。授業料は当然ながら、通学用自転車、バイク、参考書等も手にすることが出来た。

念願かなって高校入学を果たした。そこにはその後の我が人生を左右することになるとてつもなくユニークで大きな心を持った先生がいた。大学を卒業し、着任したばかりの新任教師で、私のクラスの担任となった。この道立高校もご多分にもれず、がちがちの厳しい校則に守られ、仁王様のような教頭先生が睨みを利かせていた。道立普通高校移管第一期生だったこともあり、問題が生じないよう特段の厳しい対応がされていたようでした。そんな校内のピリピリ感もものともせずに、我がクラスの担任新任教師は、自由に生徒との交流に時間を惜しみませんでした。現代文・古典の

先生でしたが、英語でも数学でも何でもござれでした。生徒の自主性を重んじ、生徒が行動を起こしたらじっと見守り、陰ながら応援するという先生で、学校行事の企画や各種の活動も仁王様から生徒を護ってくれた。私が企画発案した同級生との「道内バイク旅行」は高校生活最大の個人的イベントであったが、頑として許可しない仁王様を口説き落としてくれた。条件は担任が同行することである。参加する予定の５人のうち運転免許証がないのは３人で、先生も無い。猛特訓の勉強で試験に臨んだその結果、不合格は先生のみ、しかも学科試験で。以後、我々生徒と先生の関係は、やや精神的優位に立ったことは否めない。先生は私のバイクの後ろに乗り、３泊４日の旗振り役に徹し、無事完走した。この先生は頭脳明晰とは別に、やや野性的な面も併せ持っていた。特技は、キャベツの千切り一個分をバリバリと食べること、ザリガニ、ドジョウを生きたまま飲み込むこと等を普通にやりこなして、ザリガニやドジョウが胃の中で騒ぐとウイスキーで黙らせていた。

高校時代のこの先生との出会いが、その後の自分の生き方に大きく影響しているように思えてならない。とにかく企画して行動すること、悪しき既存の慣習に対する改善の精神を叩き込んでくれたこと、発想の転換、協調、感謝等の精神を教科書を超えて身をもって教えてくれた。高校時代の学び体験が、その後の職場となる法務局生活の中で少しばかりでも芽を出してくれていればいいのだが。この恩師との出会いには感謝しかない。

さて、いよいよ私の人生の大半を奉げる法務局に勤務することとなる。初任地は札幌法務局民事行政部登記課。ここでは更なる多くの出会いが待ち受けていた。社会人として、公務員として、法務局人としての心構えを叩き込んでくれた先輩諸氏。不動産・商業法人登記の基本を教授・指導してくれた神様登記官殿。仕事に取り組む姿勢を背中で見せてくれた先輩諸氏。働きながらでも学業を修めることが出来ることを教えてくれた先輩。成人となって、酒の飲み方をしっかりと叩き込んでくれた先輩諸氏。そこには若輩者であろうと何でも意見が言えて、それを聞いて意見を交換できる職場があった。法務局人としての基礎を叩き込んでくれた先輩諸氏との出会いであった。ある３月某日、公文書の発出者の公印を押して頂くために、公印を管理している課長（当時の噂では、細かくて、怖い、礼儀作法に特にうるさい。）のもとに赴き、恐る恐る「公印をお願いします。」と書面を差し出したところ、じっと私の顔をみて（睨みつけて？）「あれ、あけみちゃんじゃないか。居たいた、ここに居たのか。」と、突然に訳のわからない声を上げて、当時の私の上司である本省出身の課長のところに駆け込み、かくしてその日のうちに本省民事局への転出が内定してしまった。まさに、ビックリ仰天の出会いであった。新車を購入し、妻は２人目を妊娠中という最中の出来事である。

再びのさて、である。何だかよく訳のわからないうちに、法務省民事局というところに遥か北海道から辿り着いた。登記行政に憧れを抱いていた私でしたが、配属先の

業務は登記とは違い、定員・定数・営繕・予算等の管理業務に配属されることが多くなり、その職務に携わる先輩、上司の方々の仕事に対する熱意は凄まじく、その上、専門的な知識・識見を持ち、スピードと即決力を併せ持ったパワーに完全に圧倒された。しかも少人数で、役職関係なく議論を闘わす情景は、どこかであこがれていた情景であった。教えを頂いた先輩、諦めず気長に辛抱強く指導を頂いた先輩諸氏には感謝の気持ちしかない。お名前を挙げて感謝の意をお伝えしたいが紙面が足りないのでお許しを願うこととする。今でも引き続きご指導頂いている方、鬼籍にお入りの方も多い。その後、民事局を経て各地の法務局・地方法務局に勤務する機会が多々ありましたが、そこでの職員との出会いが今尚私の心の中に燦然と輝き放っていて、生きる力の一つになっていることは疑いようもなく、嬉しい限りである。

この誌面では紹介することはできませんでしたが、私にとってかけがえのない大切な出会いが多々ある。共に通信教育で学業に励んだ仲間、司法書士・土地家屋調査士・行政書士等の専門家の方々、他省庁の方々、学割・出世払いで飲ませてくれた夜の部の応援者？の方々等々の出会いはまさに大切な財産である。

数々の出会いが私の人生航路を切り開き導いてくれた。人との出会いが私の人生そのものである。

そして、最後とはなったが、やはり我が人生最大の出会いは、この世に生み育ててくれた父・母であることには当然感謝しているが、やはり妻との出会い、結婚であることは言っておくべき確かなことである。結婚51年目を進行中である。感謝の気持ちは持ちつつも、言葉にするのはまだ先になるらしい。つい書き忘れるところでしたが、この出会いについては、いずれかの機会に語ることもあるかと（きっとその機会は訪れないと分かっているが。）。

最近のあるテレビ放送で、某出演者が「年を重ねるということは、出会うより別れが多くなるということ。」と話すのを耳にして、なるほどと思いながら、これからの少ない出会いを一層大事にしたいという気持ちになった。

今日も日課としているウォーキングという散歩の途中で、ふと、自分の名前は戸籍上の「暁」を言わば勝手に？「あけみ」と75年間も呼び続けているが、民事局が検討している戸籍法が改正されたらどう読み仮名を付けられるのだろうか。改正法施行から1年以内に読み仮名を届け出すれば、正式に戸籍上も「アケミ」と認められるようであるが、届けなければ市町村が何と読んでくれるのか、「アキラ」か「サトシ」かと思っていたら、どうやら住民票の記載を参考にするらしいから、やっぱり「アケミ」に落ち着きそうである。「アケミ」は今でいうキラキラネームでもないし、この機会に「あけみ」から脱皮して、男らしい？違う読み仮名にして、新しい自分に出会うのもいいかなとも思いながら、・・・♪♬アケミという名で18で・・♬・・と口ずさんでいたらつまずいた。やっぱりすかさず振り向いた。